

防災歳時記 (25)

—雲の峰—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

雲の峰

梅雨が明けると夏がやってくる。夏といえば、もくもくと林立する雷雲が「風物詩」である。夏はひとときわ勇壮な雲の美しい季節でもある。

雷雲の白い峰には、その土地土地で独特な名前がつけられている。関東地方では坂東太郎、阪神地方は丹波太郎(丹波方面からくる雷雲)、九州では彦太郎(英彦山の方からくる雷雲、比古太郎とも書く)、そのほか、信濃太郎(長野)、石見太郎(島根)、安達太郎(福島)などがある。

太郎は最も大なるもの、すぐれたもの、第1のものを意味するほか、雲の峰をも指す。雲の太郎は威圧感をもって君臨する英雄を幻想させる。

雲の峰のできるわけ

夏の強い日差しによって地面や山体が暖まる。すると上昇気流が発生して、丸い頭がいくつもある雄大な積雲(綿雲=わたぐも)がそびえ立つ。花キャベツやカリフラワーに似ている。このとき、上空に寒気が流れ込むと、大気の状態が一層、不安定になる。不



写真1 雄大積雲

安定になると上昇気流がますます強くなって、1万メートルを越すような雲の峰に発達する。このような雲を積乱雲(俗に雷雲)と呼ぶ。

もくもくとした積雲(雄大積雲)の上部が氷の結晶となり、はけではいたような繊維状に見えると立派な積乱雲で、雷光や雷鳴が聞こえるようになる。

雲の頭の部分が風下に流れると鍛冶屋で使う鉄床(かなとこ)に似るので、かなとこ雲と言う。上空の風が弱いと朝顔の花に見えるので朝顔雲という。俗に入道雲と言うのは、雄大積雲または積乱雲のことを指す。

落雷から身を守る

雷雲からの雷鳴や稲妻による恐怖も手伝って、昔から「地震・雷・火事・親父」って雷は非常に恐れられてきた。落雷はさまざまな種類の被害を発生させる。例えば、①落雷死、②火災、③航空機の避雷、④電力施設の被害、⑤通信施設やコンピューターの被害などである。

落雷死は、ほとんどが落雷の直撃による死亡だが、近くへの落雷の衝撃によるがけ下への転落死や、強烈な雷鳴によるショック死も落雷死に数えられることがある。

昔の落雷死は農作業中の人に多かったが、最近では登山、ゴルフ、テニスなど屋外スポーツを楽しんでいる人に多くなっている。

登山中の落雷事故としては、ユ 967 年(昭和 42)8 月 1 日午後 1 時 30 分ごろ、北アルプス西穂高独標で松本深志高校の生徒の団が落雷に遭い、11 人が死亡し 12 人が重軽傷を負うという大惨事があった。

ゴルフ場の落雷事故としては、1997 年(平成 9)9 月 8 日の茨城県桜川村霞台カントリークラブでの惨事がある。午後 1 時 30 分ごろ落雷がありゴルファーとキャディーが 3 人死亡、2 人がけがをした。木の下に避雷したが、木に近い人は即死、木の幹や葉から 2 メートル以上離れた人にはけがは無かった。生死の境は、木の幹や葉から 2 メートルだっ



写真 2 発達した積乱雲 (機上撮影)

た。

落雷から身を守る具体的な方法を記したい。

①導体に囲まれ、落雷が進入しない安全空間に退避すること。有蓋の自動車、バス、列車、コンクリート建物内にとどまる。

②テレビセットなどすべての電気機器から 1 メートル以上離れ、電話は使用しない。

③高さ 4 メートル以上の物体の傍らでは、その頂上を 45 度以上の角度で見上げ、物体から 2 メートル以上離れた位置で姿勢を低くする。樹木の場合、すべての枝先、葉先から 2 メートル以上離れる。

④高さ 4 メートル以下の物体からは遠ざかる。

⑤安全な空間から離れた平地、ゴルフ場、ハイキングコース、登山コース、海岸などでは落雷を受ける確率が高い。このような所では安全手段がないので、出かける前には十分に天気予報を調べる。雷鳴や電光を察知したならば、できるだけ早く避難する。特に注意したいのは、「からかみなり」である。雷特有の強いにわか雨がなくて、霧や暗雲の中で突然電撃を受けることがある。避難する余裕がないから恐ろしい。